
俺が笑わない理由（仮）

泡 照名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が笑わない理由（仮）

【Nコード】

N9475X

【作者名】

泡 照名

【あらすじ】

笑わない男、伊立秋作を、クラスの学級委員長の芹川由莉香が笑わせようと試みる。芹川に愛想笑いでもいいからと言われ、伊立は言われた通りに愛想笑いをした。すると、芹川は伊立に惚れて…

…

一話 俺が笑わない理由（前書き）

よろしくです。

一話 俺が笑わない理由

いつからだ？俺が、笑わなくなったのは――

いつからだ？どんな事も、如何どうでも良いと思えてしまつようになつたのは――

そうか、あの時か――。

「……作くわ……秋作あきくわ……起きろつて」

「誰だ。俺の眠りを妨さまたげる奴は……」

俺は、寝ぼけ眼まなこを擦こすりながら目を開けた。

寝起きなので、視界が霞かすんで良く見えない。

「……誰だ？」

「お前の唯一無二の親友だ」

「そんな奴いたか？」

「そりゃ、酷ひどくないか？」

視界が元に戻ってきた。

今なら見える。

こいつは――

「『嶋柿しまがき』か……」

「『嶋柿やまどり』じゃない、山鳥木市きいちだ」

俺は、伊立秋作いたつきくつて名前だ。

そして、こいつは、本人が言ったように、山鳥木市と言つ名前だ。山を編あにして、鳥をくっつけて『嶋』、木を編あにして、市をくっつけて『柿』、その二つを合わせて、『嶋柿』と呼ばれている。

嶋柿は、何だかんだでいい奴だ。

悩み事があれば聞いてくれるし、秘密は守ってくれる。たまに、ウザいボケをかましてくるのが玉に傷なんだが……。まあ、笑いを取ってくるのは俺のせいなんだけどな。俺が……笑わないからだよな……。

今でも覚えてる。

俺は、小学校四年生の時に、突然、笑えなくなった。理由は、両親の死亡。

泣いた。ずっと泣いた。一晩中、朝が来るまで泣いた。そこで涙は枯れ尽きた。

笑うのさえ馬鹿らしく思えた。怒っても意味がないと悟った。

喜びという言葉の意味が分からなくなった。

そんな時に出会ったのが嶋柿だった。

嶋柿は、感情を忘れた俺に、感情を取り戻させてくれた。

だが、俺は感情を表に出す事が出来なかった。

多分、事故のことを引きずっているんだろう。

だから、俺の感情を表に出させようと、嶋柿は俺を笑わせようとしてくれている。

だから……

「ありがとうな」

この言葉を親友に送る。

「急にどうした？秋作」

「いや、なんでも無い」

「……？」

嶋柿は首をかしげながらも、唸^{うな}ると

「ま、いつか」

と納得いかなさそうな顔で呟いた。

そして嶋柿は手に持っていた本を俺に見せる。

本には『理科』と大きく書かれていた。

「ほら、移動教室だぞ」

「ああ」

俺は嶋柿の言葉に二つ返事で答えて、机にもたれていた体を起こし、机の中をこそそこそと漁った。

そして、嶋柿の持っている本と同じ——理科と書かれた——本を手にとって、椅子から立ち上がった。

♀

そういえば、伊立^{いだて}君が笑ってるのって見たこと無いような。

私は焦点の合わない瞳^{ひとみ}で時計を見ながらそう思った。

「由莉^{ゆりか}香あ」

「ひえっ！ な……何、奈々^{ななえ}恵？」

「そんなに驚かなくても……。何を物思いにふけているのかと思っ
つてね」

「伊立君が笑っているのって見たこと無いな……って思っ
てね」

「まさか由莉香……伊立のことが……？」

「そんなことは無いよ。……ただ、学級委員として、クラスに笑っ
ている人がいないのはどうか、と思っ
て……ね」

「ほあ。確かに、伊立^{いなす}が笑っているのは見たこと無いな」

奈々恵はうんうんと頷きながら言った。

「でしょ？ だから、笑ってほしいな、って思ったり、思わなかつ
た
り……」

「まあ、伊立が笑わないのも、それ相応の理由があるんじゃない？
人のことにあまり首を突っ込まない方が得策だと思っ
うよ」
それ相応の理由か……。

「ねえ、由莉香？」

「何？」

「そろそろ理科室に向かったほうが良よくなくない？」

奈々恵が、時計を指差して言う。

時計は、十一時四十七分を指している。

授業が始まるのは十一時五十分。

「そうだね、早くいかないと遅刻つけられちゃうね」

私は、机の上の用意してあった、理科の教科書を手に取り、教室を後にして走った。

一話 俺が笑わない理由（後書き）

一日一話登稿を心がけます、がどこまで続くのでしょうか？
温かい目で見えていただければ幸いです。

二話 俺の愛想笑い

○

「キーンコーンカーンコーン……」

チャイムが休み時間の終わりと、授業の始まりを告げる。

「起立……」

誰かが言った授業のあいさつの号令の声の途中で、扉がガラガラと音を立てて開いた。

「すみません……遅れました……」

切らした息を整えながら入ってきたのはうちのクラスの学級委員の芹川由莉香とその親友の奈々宮^{ななみや}奈々恵だ。

芹川と奈々宮は申し訳なさそうな顔をして——奈々宮は、平然とした顔で、芹川についていつているだけだが——、空いている席を探している。

この学校では、移動教室の時は座席の指定が無いのでどこに座ってもいいことになっている。

そして、俺は目立たぬように、教室の一番端にあたる席（およそ、四人が横に並んで座れる席）に、嶋柿と共に横に並んで座っていて、俺の横には二つの空席がある。

もちろん俺の隣に好き好^{すこの}んで座りたがる輩^{やから}はそうそういない。だが、今日はいた。

俺は、ふと顔をあげて顔を確認する。

芹川と奈々宮だった。

「伊立君、隣、いいかな？」

他に空いている席があるのに、物好きな奴もいるんだな、と思いたがらも、

「どうぞ」

と一言で返した。

芹川が俺の隣に座ると、奈々宮も芹川の隣、つまり、俺の二つ隣に

座った。

教室の前方では、教師が授業を行っている。

「伊立君」

話しかけてきたのは、芹川だった。

「何ですか？」

俺は、棒読みで返した。

「何で伊立君は笑わないの？」

「……」

一番聞かれたくない質問が来た。

「伊立は笑わないというより、感情を表に出さないと聞いたほうが正しいかな？」

俺の代わりに嶋柿が芹川に指摘した。

だが俺は、

「嶋柿、要らないことは言わないでくれ」

と、嶋柿の方を、数秒見てから、芹川に視線を戻した。

「何故、^{なぜ}『今』聞いたんですか？」

俺は、『今』の部分を強調して言った。

「学級委員として、クラスに笑っていない人がいるのは、どうかなって思ってた……」

俺は、今じゃなくても良かっただろう、という思いを乗せた、ため息をついた。

「俺は授業に集中したいんで」

とりあえず俺は、授業に集中したかった。

今までの五分間、芹川との話に専念しすぎて、教師の話は何も聞いてなかったから、ここで遅れを取らないためには、ここからの、教師の話は聞き逃すわけにはいかないと思ったからだ。

「笑おうよ。伊立君」

こいつ、人の話を聞いていたか？

「とりあえず作り笑いでもいいから笑おうよ」

俺は黙って笑って——営業用スマイルと言ったものだろうか——

——、をして、教師の話に耳を傾けた。かたむ

♀

え……？あ……。

伊立君が、笑った？

いつものようにクールな雰囲気とは違う、無邪気な感じで、『格好かっこ良く』ではなく『可愛く』笑った……。

でも多分あれは作り笑い……だと思う。

心の底から笑った伊立君はどんな顔なんだろう？

正直言つて……見てみたい……。

「どうしたの？由莉香、顔真っ赤だよ？」

「ほ、本当に？」

奈々恵は前髪をかきあげ、私の額と、奈々恵の額を軽くぶつけた。

「熱は無さそうだね。……もしかして、伊立にひどいこと言われた？」

「違うの……そんなんじゃないの」

この気持ちをどう説明すればいいんだろう。

モヤモヤと言つか、ドキドキと言つか……。

「由莉香、まさかやつぱり、伊立のこと……」

「わからない……。なんて説明すればいいんだろ……」

「どういうことかわからないけど、話は後で聞くよ。とりあえず、席、替わろうか？伊立の横じゃ、色々と気まずいでしょ」

私は無言で頷いて、奈々恵と席を交代した。

三話 俺の名前

♀

授業が終わり、教室に戻って、私は奈々恵に大体の事情を説明した。

「……それで、伊立のその笑顔を見て、伊立のことを好きになったということ？」

「好き、って言うか、どういえばいいんだろう？」

（それを恋って言うんじゃないか？）

「ん？なんか言った？奈々恵」

「いや、何でもない」

……？奈々恵は、何を言っただろう？

「それで、その笑顔はそんなに可愛かったんだ」

「うん。何ていうか、いつもと違う感じで……。ギャップかな？」

「ほお。確かに、伊立の笑顔はあたしも見てみたいねえ」

「でしょ？だから、伊立君をもっと笑わせたい、もっとあの笑顔が見たい、心の底から笑ってもらいたい」

「良いねえ、青春だねえ。……よし、それならあたしも一肌脱ごうではないか！」

奈々恵は腕捲りうでまくをして立ちあがった。

私は伊立君の前に立ち、奈々に言われた通りの言葉を言った。

「伊立君」

「何ですか？」

「伊立君の下の名前って秋作だよな」

「そうですけど……何か？」

伊立君は半眼で睨にらんできた。

「秋作君、って呼んでいい？」

「理由を求めます」

り、理由？ど、どうしよう、えーっと……。

「理由が無いならやめて下さい」

「伊立君と仲良くなりたいから……」

「じゃあ、まず『君』を付けるのをやめたらどうですか？」

「じゃあ、『伊立』って呼べばいいの？」

「はい。それじゃあ、俺は用事がありますので」

伊立君は、踵^{きびす}を返して、私から離れて行った。

「と、言うわけなんだけど……」

「由莉香、それじゃ、距離を縮めるところか、むしろ距離が遠ざか
つてるよ」

「だよね。……どうすればいいんだろう？」

奈々恵は腕を組んでしばらく唸ると、自信有り気にかう言った。

「よし、良い考えを思いついた」

奈々恵は、薄い胸を張って立ち上がった。

四話 俺とタメ口と人間関係

ただいま

只今、午後一時、十二分。

五限目が始まるまであと十三分。

あまり時間は無いが、今俺がいる、二階の渡り廊下から、三階の教室に戻るには十分な時間だ。

そんなことを考えながらも俺は教室に向かっていた。

「おい、伊立」

ふと、後ろから声かけられた。

俺が振り返ると、そこには奈々宮がいた。

珍しく一人なのか、と思ったが、話を長くしたくは無かったので、口には出さなかった。

「何ですか？」

俺は、いつも通りの言葉で返事をする。

「あんたは由莉香のこと、どう思ってるの？」

由莉香……？ああ、芹川のことか。

「『どう』とは？」

「まあ、好意を持ってるか持っていないかだよ。簡単にいえば、好きか嫌いかなだね」

「どちらでも無いですね。無関心、ってところでしょいか？」

「へえ……。由莉香はあんたのことが好きみたいだね」

この女はそれを俺に言っただけでどうしろと言っただけだ？

「そうですか」

「あれ？反応無し？」

「無関心、と言っただけですけど？」

「へえ。そっか、じゃあね」

何だ、奈々宮の奴、それだけを言うために来たのか？

「伊立、敬語はやめなよ、タメ口でいいよ」

奈々宮は去り際に言って、どこかに行った。

「タメ口……か……」

そうか、そう言えば、今はタメ口は嶋柿にしか使ってないな。

「悪くはないな……」

俺は時計を見た。

午後一時二十三分。

「さて、少し焦るか」

俺は、教室に普段より少し足を速めて向かった。

+

私は、教室の窓にもたれて、時計を見た。

午後一時二十三分を時計の針が指し示している。

「ただいま」

と、不意に後ろから肩を軽く叩かれた。

私が振り返るとそこには奈々恵がいた。

「おかえり、どこ行ってたの？」

奈々恵は私から目をそらした。

「秘密だよ」

ばつが悪そうな顔で奈々恵が言った言葉に私はこう返した。

「伊立君の所……じゃないよね？」

「そんなわけないよ、違うよ」

「じゃあどこ？」

冷や汗をかいている奈々恵に詰め寄る。

「プ、プライバシーの侵害だよ。い、いくら親友の由莉香でも言えないことが……」

「……」

私は半眼で見詰め続ける。

「……い、伊立君のところに行っていました……」

奈々恵は両手をあげて言う。

恐らく『参りました』の意味を込めて、両手をあげたのだろう。

「何を言ってきたの？」

「さすがにそれは……」

奈々恵は再び目をそらす。

「まさか……」

私がそう言つと奈々恵は唾を飲み込んだ。

「奈々恵も、伊立君のことが……」

奈々恵の顔は紅潮し、奈々恵の口からはこんなセリフが飛び出した。

「違つよ、伊立に由莉香が伊立のことを好きだ、って言っただけで

……」

「えっ……」

奈々恵は両手で口を押さえて、しまった、と言いたげな顔をしている。

先程まで赤かった顔がみるみる内に、青くなつていく。

「バカ奈々恵……！！！！」

「ごめんって、由莉香！伊立の気持ちを知つといた方がいいと思つて……」

私は深呼吸をして落ち着きを取り戻そうと図る。

すう……はあ……

「……で、どんな返事が返ってきたの？」

「き、聞くの？」

私はうん、と言つて首を縦に振る。

「本当に？」

「何をもつたいぶってるの？……まさか、伊立君は私のことが嫌い……とか？」

「はずれ」

「……ということは、伊立君は私のことが……す、好き……なの？」
私が言つと、奈々恵は大きくため息をついた。

「残念ながら、それもはずれ」

「？……じゃあ、どういうこと？」

「無関心、だつてさ」

「無関心……」

と言うことはつまり……

「嫌われているよりはマシだね」

（何とポジティブな……関心すら持ってもらってないんだよ……）
「ん？なんか言った？奈々恵」

奈々恵が小声で何か言っていたみたいだけど、聞き取れなかった。

「何でもないよ」

「教え」

「キーンコーンカーン……」

私の言葉はチャイムに遮られた。

「さあ、席に着こうよ。由莉香」

奈々恵は私ではなくて、左を——奈々恵から見ても右を——見ている。
「う、うん」

奈々恵の視線の先では、伊立君と山鳥君が話していた。
え？あれ？まさか……奈々恵、伊立君のことが……？

五話 俺の性格と説得

○

五時間目が終わり、休み時間が始まった。

みんなが各々で散り散りになって話している。

そんな中、俺はふと芹川と奈々宮のことを考えていた。

全く、何なんだ？ 芹川と奈々宮に俺は何か悪いことをしたか？

「どうしたんだ？ 秋作、さっきから何をブツブツ呟いているんだ？」
不意に嶋柿に話しかけられた。

「声に出てたか？」

「ああ。『芹川が』とか、『奈々宮が』とか聞こえたけど」

嶋柿なら信用できるから、相談してみるか……。

「最近、芹川と奈々宮に執拗しつように話しかけられるんだが……」

「別に良くないか？」

女子に話しかけない奴がいる中で、クラス一番——いや学年一番
と言われている美少女達に話しかけられているんだぞ？」

「そういうものか？」

「そういうものだろ。で、何を言われたんだ？」

「俺のことが好きだ、って言う冗談を……。」

一瞬、嶋柿の顔が強張る。
こわば

そして、真剣な顔に戻し、こう告げた。

「どちらに——だ？」

「奈々宮に」

「そうか」

嶋柿は大きな溜息をついた。

そして、俺は詳しく説明を続ける。

「奈々宮が俺に『芹川は俺のことが好き』って言ったんだよ」

再び、嶋柿の顔が強張る。

俺は構わず続ける。

「俺みたいな性悪男めいあくおとこを好きになるはずなんて無いよな」
「普通に好きになるんじゃないか？」

……。

少しの間、俺は沈黙した。

そして、嶋柿を諭さとすようにこう告げる。

「アホなこと言うなよ。嶋柿」

「アホなことを言った覚えは無いし、嶋柿でも無い」

「じゃあ何だ？ 笑いもしない俺を好きになる奴がいるとでも言いたいのか？」

「そうだ。『笑わない』『イコール』『好きにならない』ってわけではないだろ」

無意識に俺の口から深い溜息が出た。

「嶋柿」

「山鳥だ」

「普通の女が好きになるとしたらお前の方だろ」

「何故だ？」

嶋柿は何のことかわからない、と言いたげな表情で首をかしげた。

そんな嶋柿に言い聞かせる様に俺は続けた。

「面つらは良いし、勉強も運動も出来るし、嶋柿がモテないはずが無いだろ」

「解げせないな。性格は置いといて、面や勉強や運動はお前の方が出来るだろ。そして、俺は山鳥木市だ」

「仮に俺の方が性格以外の部分が良いとしても、この性格だぞ。この性格が全てダメにしている」

「別にお前の性格は悪くは無いだろ」

……。

俺は再び沈黙した。

嶋柿の方を見ると、俺は可笑おかしなことを言ったか、という心の声が、嶋柿の顔を見ただけで分かった。

「悪くは無いと思うんだが」

何の躊躇もなく嶋柿が言う。

これは、嘘の言葉ではない、嶋柿の心から出た本当の言葉だろう。

「俺の性格なんて、人類最悪だろ」

少し大袈裟に俺は言った。

すると嶋柿は苦笑して、こう告げた。

「そんなに大したものじゃないだろ」

「今のは言いすぎたかもしれないけど、俺の性格はかなり悪いと思うぞ」

「秋作は悲観的過ぎる。悪いのは秋作じゃなくて、あの事故じゃないか？」

嶋柿が言った事故と言うのは、俺の両親の死因の交通事故のことだ。

「でも、この性格を直そうとしない俺も悪いんじゃないか？」

「かもな」

嶋柿は反論しなかった。

そしてこう続けた。

「でも、全部が全部、お前の所為、^{せい}というわけではないだろ」

「ムウ」

俺は言葉に詰まった。

嶋柿は俺の反応を見て、続ける。

「何でもかんでも自分の所為にするなよ。たまには人に責任を押し付けてもいいんだ」

「だけど、それは綺麗事過ぎないか？嶋柿」

「思考は自由だ。少なくとも俺はそういう考え、っただけだ。そして何度も言うが、山鳥だ」

その考え方はあまり理解できない。

だが、世界は俺と同じ考え方の人しかいない訳ではない。

むしろ、俺と違う考え方をする人の方が多いだろう。

「何か良く分からないが、納得した」

「分かってくれりゃいいんだ」

良く分からないが、解決した……と思う。

俺は時計を見る。

六時間目が始まる二時二十五分まで、あと一分。

「さてと、あと一時間頑張るか」

俺は呟いて、伸びをした。

六話 俺と枕女

♀

六時間目が終わり、皆、帰宅の準備をしている。

一方、私は奈々恵に言われたことを実行しに伊立君の席に向かっている。

隣には奈々恵がいる。

伊立君と一緒に帰ろうと誘いなさい、と奈々恵に言われたからだ。奈々恵がついてきているのは山鳥君を引き離して、私と伊立君を二人きりにする為らしい。

「伊立君。ちよつと良いかな？」

「何でしょうか」

いつも通りの仏頂面で伊立君は返事した。

「一緒に帰らない？」

伊立君は頬杖をつき、考えるような仕草を見せる。

そして、頬杖をやめ、私に問いかけてきた。

「共に帰って、俺に何の利点があるのでしょうか」

「利点っ？」

そんなの考えてなかったよ。

えーっと……。

「秋作」

伊立君の声でも、奈々恵の声でも無い声が聞こえた。

声のする方へ顔を向けると山鳥君がいた。

「お前、本当に損得で動くなあ。女子にそう言うのを頼まれたら、断っちゃだめだろ」

「別に断ってねえよ」

「そんな嫌そうな顔でそんなこと言ったら、断ってるのと一緒にだろ」

伊立君は右手で顔を触りこう言った。

「そんなに嫌そうな顔、してたか？」
「してた」

山鳥君に言われると、伊立君は申し訳なさそうな顔をして、
「すみません」

私に謝ってきた。

「そ、そんな迷惑に思っ
てないよ」

私は全身で否定をした。

「と言うか」

話に割り込んできたのは奈々恵だった。

「敬語はやめろって言ったはずでしょ。伊立」

「あれは奈々宮、お前にだけかとおもっていたが」

「あれはあたしだけに、じゃなくて、由莉香にも、ってことだよ」
「そうか」

伊立君は私の方を向いてこう言った。

「じゃあ、何か良く分からないが、一緒に帰るか。芹川」

「は、は、はい」

♂

とまあ、何だかんだで、奈々宮と嶋柿の口車くちぐるまに乗せられて、四人
で一緒に帰っている。

右から、嶋柿、俺、芹川、奈々宮の順に横に並んでいる。

「なあ」

俺の右から声がした。

嶋柿だ。

「何で急に俺たちと一緒に帰るとか言い出したんだ？」

嶋柿が言ったのは芹川と奈々宮に対しての質問だろう。

この質問は俺も聞きたかった事だ。

「何となくだよ。何となく」

曖昧^{あいまい}な答えを返したのは奈々宮だった。

「そうか」

これ以上聞いたところで、どうせ曖昧な答えしか返ってこないと踏んだのだろうか、嶋柿は深くは聞かなかった。

そして、話している間にも、いつも嶋柿と別れる十字路に着いた。

「じゃあ俺はここで」

嶋柿は手を上げて、別れることを俺たちに示した。

「じゃあ、あたしも」

「ちよつと待って、奈々恵。奈々恵はこっちからの方が近」

「じゃあね。由莉香、伊立」

芹川の言葉を遮って、奈々宮は嶋柿についていった。

「ちよつと、奈々恵！」

そんなに俺と帰るのが嫌なのか。

「ついていたら良いんじゃないか？」

「えっ」

芹川はきよとした顔をしている。

「何故^{なぜ}？」

「俺と帰るのが嫌なんだろう？」

「いや、違うの」

芹川の顔が紅潮する。

「まさか」

「っ！」

芹川は驚きと恥ずかしさが混ざった顔をしている。

「好きな人いる？」

「っ！！」

芹川の顔が、これでもか、という程、赤くなる。

「それって」

「っ！！！！」

俺は少し間を開けて、言った。

「嶋柿か？」

「へっ？」

再び、芹川はきよとした顔に戻る。

だが顔の紅潮が治まるには時間がかかるようで、顔はまだ赤い。
俺の読みは違ったのか？

「何故？」

「何故、ってどういうことだ？」

「あ……う……グスッ」

芹川は泣きだした。

「ど、どうしたんだよ」

「う……ごめんね……ちよっと……一人で帰らせて……」

芹川は一人で駆けて、帰ってしまった。

「ちよっと待てよ！芹川！」

俺が何か悪いことをしたか？

思い出せ。俺は……。

「由莉香はあんたのことが好きみたいだけどね」

……そうか、あれは本当だったのか。

「あゝあ、泣かしちゃったね」

不意に、声が聞こえる。

女性の声だ。

俺は辺りを見回す。

しかし、何もいない。

「空耳……か？」

「違うもん！ここにいるもん！」

俺は下を見た。

そこには枕を持ち、うちの学校の制服を着た小さな女がいた。
迷子だろうか？

いや、でもうちの学校の制服を着てるし……。

「そいや！」

枕女は持っている枕を俺を狙って振りまわした。

俺は枕を左腕で防いで、空いている右腕で枕女から枕を取りあげる。

「何するの。それ私のだもん！」

「ふざけるな。いきなり枕で殴ってきた奴が何を言う」

「返せ。それは窃盗だもん」

枕女はジャンプをして、必死に枕を取り返そうとしている。
俺は、届かないように枕を高く掲げる。

「分かった。返すから、俺を殴るのをやめて家に帰れ」
「分かったから返せ」

枕女はジャンプを続ける。

本当に分かっているのだろうか？

「はいよ」

俺は、枕を上投げた。

「なっ!?!」

枕女は上を見て、枕の落下地点に走り出す。

その隙を見て、俺は全速力で、枕女から逃げた。

枕を取り終えたのだろうか、後ろから、ばかり、と聞こえたが、
聞こえないふりをして俺は駆けた。

俺は思わずため息をついた。

変な奴に絡まれたな、と呟いて、家路を駆け続けた。

七話 俺の親が死んだ理由（前書き）

嶋柿視点の話です。

七話 俺の親が死んだ理由

嶋柿視点

芹川と秋作と別れ、家路を共に歩いているのは奈々宮だ。

「なあ」

「な、なに！？」

そんなに驚くほどの大きな声で言ったか、と思ったが口には出さず、小さな声で、続けた。

「奈々宮。お前は秋作と芹川にくつついて欲しいと思うか？」

「う、うん。そうね」

ん？明らかに奈々宮の様子がおかしい。

そう言えば、顔が赤いし、喋り方も変だ。

「如何した。奈々宮。顔が赤いぞ」

「そう、かな？」

何故かあわてて顔を隠す奈々宮。

「熱でもあるんじゃないか？体の節々が痛い、とか無いか？」

「違うよ。大丈夫だから」

とりあえず、奈々宮の額に右手を伸ばす。

「ひゃう！」

奈々宮は驚いた様子で悲鳴（？）をあげた。

俺は特に気にせず、左手で、自分の額に触れ、温度の差を計る。

「熱……は無さそうだな」

では何故、顔が赤いんだ？

「そ、それよりさ」

奈々宮が強引に話を切り替えた。

「どうした？」

俺は強引に切り替えられた話に逆らわず、便乗した。

「嶋柿君って好きな人いる、かな？」

遂に、伊立が俺に付けたあだ名が伊立以外の奴に定着してしまっ

ていたようだ。

「いない、と言えは嘘になるかな？」

「……」

奈々宮は、複雑な顔をしている。

笑顔は笑顔なのだが、何か作り笑いが五割くらい含まれているような、そんな笑顔だ。

「あと、言っておくけど、俺は山鳥木市だ」

「あ、ごめんね」

「山鳥か木市って呼んでくれると嬉しいかな？まあ、嶋柿以外なら何でもいいが」

これ以上、嶋柿、と言うあだ名を広げないためにここで喰い止めておかないとな。

「じゃ、じゃあ木市、で良いかな？」

「おう」

「え、えつと、き、木市君……」

奈々宮の顔が紅潮していく。

耳まで赤い。

「やっぱり駄目！山鳥君って呼ばせて」

「嶋柿以外なら何でもいいぞ」

奈々宮はうん、と頷く。

顔の赤みは引いていないが、落ち着いてきたようなので、奈々宮がおそらく聞いていなかったであろう最初の質問をもう一度聞きなおした。

「もう一度聞ぐが、お前は芹川と秋作にくっついて欲しいと思うか？」

「そうだね。由莉香は伊立のことが好きみたいだから、親友としてくっついて欲しいと思うね」

「じゃあ、芹川が伊立を好きになった理由は？」

「愛想笑い、だってさ」

……？

「それ、どういう意味だ？」

奈々宮に大体の事情を説明してもらう。

「つまり、芹川は秋作の笑った顔に惚れて、本当に心の底から笑って欲しい思ったわけか」

「そう。だからいろいろと頑張っているみたいんだけど、伊立が鈍感すぎて由莉香が空回りしてるんだよ」

「まあ仕方ないさ。あいつは愛される、ということをおそらく知らないからな」

奈々宮が何のことかわからない、と言いたげな表情を浮かべる。

もしかして、秋作と俺以外は秋作の親が死んだことは知らないのか？

「奈々宮。秋作の親のことは知っているか？」

「伊立の……親？」

「知らないか」

「何？伊立の親がどうかしたの？」

「誰にも言っなよ」

奈々宮が頷いたので、あの日の交通事故のことを話した。

「だから、あいつは愛というものを知らないんだ」

奈々宮は驚愕の表情を浮かべていた。

「その事故って……！！」

「何か知っているのか？」

「由莉香のお父さんが交通事故を起こした日時と場所が同じ……」
「っ！！？」

つまり……それって……。

「秋作の両親が死んだ原因は……芹川の父親なのか！！？」

ポツリ、ポツリと雨が降り出した。

俺と奈々宮は雨宿りをしに、屋根のある店の前に走った。

この事実を秋作に伝えるべきなのだろうか？

「由莉香にこの話、伝えた方がいいのかな？」

どうやら、奈々宮も同じことを考えていたようだ。

「とりあえず、これは黙っておこう。話すのはタイミングを見計ら

ってだ」

「わかった」

奈々宮は俺の方を真っ直ぐに見て、頷いた。

「とりあえず、連絡が取り合えるよう、携帯の電話番号を教えてください」

「え？あ、うん！あ、そうだ。由莉香のも教えるね」

「あ、ああ。じゃあ俺も秋作の番号も教えるよ」

俺は携帯電話の画面からふと、眼を離し、空を見た。

どんよりと黒い雲が、青空を遮り、見えない。

雨脚は弱くも、強くもなっていないが、雨は止みそうになかった。

八話 俺の謝罪と芹川の涙（前書き）

すいません、登校が一日一話のはずが、一日遅れてしまいました。

八話 俺の謝罪と芹川の涙

♀
枕に顔をうずめ、私は唸^{うな}っていた。
どうしよう。

きつと、伊立君に嫌われちゃった……。
……どうしよう……。そうだ、奈々恵に電話してみよう。
そう考え、私は携帯電話を手にとった。

「ピリリリリ」

私が携帯電話を開く前に電話が鳴った。

画面には知らない番号が表示されている。

私が電話に出ると、聞きなれた声が聞こえた。

『芹川か？俺だ。伊立だ。伊立秋作だ』

「い、伊立君！？何で私の携帯の電話番号知ってるの！？」

『嶋柿から聞いた。嶋柿は奈々宮に聞いたんだとよ』

と言うことは奈々恵は伊立君の番号を知ってるのかな？明日聞いて
おこつ。

「へ、へえ。そ、それで何の用？」

『とりあえずお前に謝る。すまん』

「な、何で伊立君が謝るの？」

『奈々宮から聞いたんだが、芹川。お前、俺に好意を抱いてるんだ
つてな』

「え？あ、あ。うう……」

『それに気付いてやれなかったんだ。謝らせてくれ。すまん』

「わ、私が勝手に想っていたのが悪いんだし、伊立君が謝る必要は
無いよ」

『そういつてもらえたら嬉しい』

「というか、何で伊立君は怒ってないの？」

『怒る？何で怒らなければならなんだ？』

「……怒ってないの？」

『怒って欲しいのか？』

「ち、違うよ！」

私は全身で否定するが、電話越しなので伝わらないことに気付き、途中で止めた。

「私はそんな特殊な趣味は持ってないよ」

『冗談だ』

「そんな分かりにくい冗談はやめてよ」

『一割ぐらい冗談だ』

「残りの九割は！？」

『真心だ』

「バファリンみたいだね」

『まあ、こんな冗談は置いといて……。良かった。元気そうだな』
とりあえず、怒っていないみたいだから良かった……。

「ありがとう」

『何がだ？』

「私を笑わせようとしてくれたんでしょ？」

返事は帰ってこない。

「だから、ありがとう、って言わせて」

『分かった。そして、実は伊立じゃなく嶋柿だったというオチで……』

……

「嘘！？」

『ハハ、冗談だよ。じゃあまた明日な』

私がじゃあねと言うと電話は切れた。

………伊立君、笑ってなかった？

うん、確かに笑ってた。

………そもそも、伊立君が笑わない理由ってなんだろう？

♂

切った携帯電話を片手に俺は考えていた。

俺、今、笑ったか？

いや、まさか、そんなはずは無いだろう。

でも、笑っていたとしたら、俺はあの事故のことを忘れることが出来ていると言うことになるよな。

「よしっ！」

事態は今のところ良い方向に転がってきている。

俺が普通に笑える日も近いかな。

俺は携帯電話を机の上に置き、風呂場に向かった。

♀

お風呂からあがった私は、タオルを頭に乗せ、パジャマのボタンを留めながら、携帯電話を握っていた。

「プルルルルル」

これは着信音ではなく発信音なのは私が掛けたからだ。

『ガチャ』

「もしもし？ 奈々恵？」

『由莉香。どうしたの？』

「さっき、伊立君から電話がかかってきたんだ」

『おー。良かったじゃん。その調子で頑張れ』

奈々恵は私のことを自分のことの様に喜んでくれた。

やっぱり、奈々恵が親友で良かった、と痛感させられた。

「奈々恵は、伊立君や山鳥君の電話番号持ってるの？」

『持ってるけど、なんで？』

「じゃあお互い頑張ろうね」

『何を？』

「恋、だよ」

『んなっ！？べ、別に私は好きな人はいないよ』
上擦うわすった声で奈々恵が言う。

「いつもより声のトーンが高くなってるよ」

『な、なってないよ！』

「ほら、今の高かったよ」

『ム、ムムム……』

私は微笑み、すぐに表情を元に戻し、奈々恵に尋ねた。

「ところで、話は変わるけど、伊立君が笑わない理由って知ってる？」

『っ！……知らないよ』

「……本当？」

奈々恵は少し沈黙して、こう言った。

『……ごめん、知っているけど奈々恵には言えないんだ』

「……どうして？」

『……ごめん。それも言えない』

「……もういいよ。切るね」

『ちょっと待って。私は由莉香の為に言っただけなんだよ』
慌てたように奈々恵が言う。

「どういう意味？」

『本当のことを知ったら、由莉香がどうなるかわからないから』

「どうなっても良いから本当のことを教えてよ」

『ごめん。言えないんだ』

『ブツッ』

私は電話を切った。

「バカ」

私たちの友情はそんな薄っぺらいものだったんだ。
親友だと思っていたのは私だけだったんだ。

「奈々恵の……バカ……」

枕が濡れていた。

目からは涙がこぼれていた。

窓の外では雷鳴とともに雨が降っていた。

九話 俺と嶋柿と真実

今日は土曜日だが、うちの高校では日曜日以外、学校があるので俺は学生服を着ている。

朝食は制服を着る前に済ませた。

俺は鞆かばんを手に取り、家を出て、鍵をかけると後ろから声が聞こえた。
「おはようさん。秋作」

声のする方へ振り向くと嶋柿がいた。

同時に、雨が降っているのが確認することが出来た。

「どうした？嶋柿」

いつもなら、俺が嶋柿の家まで迎えに行ってから登校するはずなのだが、今日は俺の家に嶋柿が迎えに来ている。

「いつもより早く起きたんでな」

あれ、嶋柿って言ったのに突っ込まねえな。

「そして、嶋柿じゃない山鳥木市だ」

あ、突っ込んだ。

「いい加減その呼び方やめてくれよ。昨日、奈々宮にその呼び方で呼ばれたんだぞ」

「良いじゃねえか。逆に何が嫌なんだ？」

「何となく嫌なんだよ」

「まあ、そう言われても、今更変える気は無いけどな」

「ああ、そうかい」

なんでだよ、とでも言うと思ったけど、もう諦めているみたいだ。

「なあ、秋作」

「何だ？」

「もしも、お前の知り合いがお前の両親が轢かれた車の持ち主だったら……どうする？」

「知っているのか？」

「もしもの話さ」

嶋柿は否定しなかった。

これは、何か裏があるな。

「謝罪を求める。それ以外は何も要らないさ。金で俺の両親が返ってきたりはしないからな」

「それでいいのか？」

「俺と、俺の両親に謝ってもらえれば、それで満足だ」

「そうか。なら……」

覚悟を決めた表情で嶋柿が言った。

「秋作、お前に真実を言おう」

俺は、嶋柿から芹川の父親が俺の両親の命を奪ったことを聞いた。

「芹川の親、だったのか」

嶋柿は俺の顔をのぞいて俺の表情をうかがおうとしている。

「こんな話、しなかった方が良かったか？」

「むしろその逆だ。ありがとう嶋柿」

「山鳥だ」

俺はその事について、恨んでいなかった。

普通なら恨む気持ちがあるものなのだろう。

けど、何故か、恨めない。憎めない。

誰かに感情を制御されているような、昔の記憶が薄れてしまっているような。

そんな不思議な感覚に見舞われた。

「どうした？」

俺は嶋柿の言葉で我に返った。

「いや、何でもない。そんな事よりさ……」

俺は首を振って、強引に話を切り替え、通学路を辿った。

十話 俺と芹川と止まない雨

俺は窓の外を見ていた。

天気が雨だと、気分も憂鬱になってしまふな。

「やー！伊立秋作って名前の奴はいるかー！」

どこかで聞いたような、高い声が教室に響いた。

俺が振り向くと、腰に手を当てた枕女が教室を覗いてきよろきよろと辺りを見回していた。

どこで俺の名前を聞いたんだか、と思いつつ枕女に背を向けた。

「む、見つけた！」

その言葉を聞いて俺が振り返ると、枕女がどこからともなく枕を取り出して俺に向けて振りかぶっていた。

「セイヤア！」

バトル漫画の様な声を出して、俺の顔をめがけて、枕を投げてきた。俺が枕をはじくと、枕で隠れた死角を利用して、新たに枕を取り出し、俺の後頭部を狙う。

俺は、軽く受け止め、「阿呆か」と、枕女の頭にチョップを入れた。それにしても、本当に同じ学校の生徒だったとは驚きだ。

てつきり、小学生がうちの学校の制服を着て、コスプレしてるのかと思っていた。

「痛たた……。……お前！窃盗の上に傷害容疑もか！」

「傷害じゃない、正当防衛だ。第一、俺がいつ窃盗をした」

「何おおおー！！！」

枕女は地団太を踏んで俺に不機嫌をアピールする。

「なあ、秋作。この娘誰だ？」

後ろから嶋柿に声をかけられる。

「知らん。枕をもった童顔どうがんの女の子のことしか俺には分からん」

「そりゃあ、見たらわかるけどさ。お前に何か因縁をもっているように見えるんだが」

「そいつは私の事をチビって言ったもん！」

枕女は抗議の声を挙げた。

「言ってねえ」

冤罪えんざいを払拭する為に俺も抗議の声を挙げる。

「言った！」

「百パーセント、確実に、命をかけても言ったと言い切れるのか？」

「むぐぐぐぐ」

こいつ、押しに弱いな。

「何さ！お前は言いきれぬのか！？」

「言いきれぬ」

まあ、ハツタリだが。

「むむう」

枕女は唸ると、枕で俺の顔を一回殴打して、教室から走り去っていった。

俺は枕で殴られたところをさすりながら、教室に入ってきた人影に目をやった。

芹川由莉香だ。いつもと違い、今日は奈々宮と一緒に登校してないようだ。

傘を忘れたのか、頭は雨でぬれていた。

「芹川の奴、気分が悪そうだな」

嶋柿が独り言のように呟いた。

「そうだな」

嶋柿の言う通り、目の焦点が合っていない。

これは何か、悩みごとをしている人間の眼だ。

励ましの言葉をかけるべきだろうか、否、それは奈々宮の役目だ。

だけど、芹川が奈々宮と共に登校していないとなると、奈々宮と何があったのだろうか。

ならば、励ましの言葉をかけるのは……

「行ってこい。秋作」

「わかってる」

俺はタオルをもって、芹川に歩み寄った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9475x/>

俺が笑わない理由（仮）

2011年12月5日21時59分発行